

1984年度舢倉島へき地診療報告

高島 一郎 (石川・5期) 現・鳥屋町診療所

I. はじめに

舢倉島は石川県輪島市より北へ約50kmの日本海に位置する離島である。島内には全科を標榜する診療所が一か所あるだけであり、必ずしも満足のいく医療が提供できていたわけではなかった。

そこで自治医科大学出身医師らの手によって舢倉島へき地診療が企画され、現在は石川県、輪島市などの協力を得て毎年夏に開催されている。

1984年度は、従来から行われていた海女の耳疾患インタビュー調査に加えて、オーディオメーターによる聴力測定を行ったので、それらの結果も合わせて報告する。

II. 舢倉島へき地診療の概要

目的：専門医療を受ける機会の少ない離島の住民に対し、「眼科・内科」および「耳鼻咽喉科」診療を実施し、舢倉島住民の健康確保を図る。なお、対象人口は約300人である。

A. 眼科・内科診療

日時：1984年8月1日、2日

場所：舢倉診療所

人員：医師3名、看護婦2名、事務員3名

方法：眼科一般診察、視力検査、細隙灯顕微鏡検査、眼底検査、内科一般診察、検尿(糖、蛋白、潜血、ウロビリノーゲン)、心電図、腹部超音波検査を施行した。

B. 耳鼻咽喉科診療

日時：1984年9月1日、2日

場所：舢倉診療所

人員：医師2名、看護婦2名、事務員2名

方法：耳鼻咽喉科一般診察、耳疾患の自覚症状に関するインタビュー調査、診断用オーディオメーターによる聴力検査(気導聴力のみ)を施行した。

III. 結果

A. 受診者の年齢分布(表1)

B. 眼科へき地診療内訳(表2)

表1 受診者の年齢分布

年齢(歳)	眼科	内科	耳鼻咽喉科
0-9	4人	0人	1人
10-19	3人	0人	0人
20-29	2人	1人	9人
30-39	3人	1人	3人
40-49	5人	4人	2人
50-59	6人	4人	6人
60-69	7人	8人	2人
70-	3人	3人	0人
合計	33人	21人	23人

表2 眼科へき地診療内訳

総受診者数	33人
異常なし	6人
白内障	5人
網膜動脈硬化症	5人
遠視	4人
近視	4人
異状片	4人
結膜炎	3人
麦粒腫	3人
糖尿病性網膜症	2人
硝子体混濁	2人
鼻涙管狭窄	2人
その他	13人

全受診者33名中、異常の認められた者は27名であった。その内訳は要観察17名、要精査3名、要治療7名であり、そのうち二次医療機関受診を勧められたのは4名(要精査3名、要治療1名)であった。

C, 内科へき地診療内訳 (表3)

表3 内科へき地診療内訳

腹部超音波検査	異常なし	12人
	胆石	2人
	計	14人
心電図	異常なし	12人
	ST・T変化	2人
	異常Q波	2人
	心室性期外収縮	2人
	QT延長	1人
	計	19人
内科一般診察	異常なし	16人
	高血圧	3人
	貧血	1人
	浮腫	1人
	計	21人
検尿	異常なし	21人
	計	21人
内科全体	異常なし	10人
	総計	21人

全受診者21名中、異常の認められた者は11名であった。その内訳は要観察3名、要精査5名、要治療3名であったが、二次医療機関への受診を必要とした者はいなかった。

D, 耳鼻咽喉科へき地診療内訳 (表4)

表4 耳鼻咽喉科へき地診療内訳

総受診者数	23人
異常なし	5人
感音性難聴	5人
外耳道炎	5人
急性中耳炎	2人
慢性中耳炎	2人
めまい	2人
耳鳴	2人
その他	4人

全受診者23名中、異常を認められた者は18名であった。その内訳は要観察7名、要精査2名、要治療9名であり、要精査の2名は二次医療機関への受診を勧められた。

E, 耳疾患の自覚症状に関するインタビュー調査の結果 (表5)

表5 耳疾患の自覚症状に関するインタビュー調査の結果

	40歳以下		41歳以上	
	男性	女性	男性	女性
めまい	1人	3人	2人	0人
耳鳴	2人	7人	1人	3人
耳癢痒感	3人	7人	2人	1人
耳痛	4人	7人	0人	1人
耳閉塞感	4人	5人	1人	1人
難聴	3人	3人	3人	2人
耳漏	3人	2人	0人	0人
異常なし	0人	0人	0人	2人
回答数	5人	8人	4人	5人

耳鼻咽喉科へき地診療受診者のうち、協力を得られた22名についてインタビュー調査を行った。

項目は表5の通りである。回答者の職業は、男性は1名を除いて漁師、女性は1名を除いて海女であった。40歳以下では、男性に耳痛、耳閉塞感の訴えが多くみられ、女性には耳鳴、耳癢痒感、耳痛の訴えが多くみられた。41歳以上の男性では難聴、女性では耳鳴の訴えが多いことがわかった。F, 簡易型オーディオメーターによる聴力検査の結果 (表6)

表6 聴力検査で30dB以上の聴力損失を示した耳数

周波数(HZ)	40歳以下		41歳以上	
	男性	女性	男性	女性
500	1	0	6	5
1000	0	0	6	5
2000	1	1	8	5
4000	1	1	8	5
検査耳数	8耳	16耳	8耳	8耳

男性8名、女性12名、計20名について気導聴力の測定を行った。対象者の職業は、男性は28歳の1名を除いて残りはすべて漁師、女性はすべて海女であった。500HZ, 1000HZ, 2000HZ, 4000HZの各周波数について、30dB以上の聴力損失が認められた耳数を表6に示した。41歳以上では、すべての男性と多くの女性に全周波数域にわたる聴力低下がみられた。

IV. 考察

離島における医療では、患者を二次医療機関に紹介するか、それとも一次医療機関で治療するか
の選択が大切な問題である。全身症状を伴う疾患
の場合には、比較的簡単に転院の機会をつかむこ
とができる。しかし、耳鼻咽喉科、眼科などの疾
患の場合には症状が局所に留ることが多いため、
重症であるにもかかわらず転院のタイミングを失
うことがある。またプライマリケア医自身も、眼、
耳の急性化膿性炎症などには経験も多く適切な対
応ができるが、後眼部、内耳、中耳などの深部病
変、特に慢性疾患になると対応に苦慮する場合が
多い。しかも、これらの病変は後に機能障害を残
すことが多く、早期発見、早期治療が強く望ま
れる。

これらの問題点を改善する試みとして、1982年
より船倉島へき地診療が開始された。これは、日
頃手薄になっている診療科の専門医を招き、疑問
点を持つ患者の治療方針についての助言をうけ、
さらには無自覚症状者の検診も行おうとするもの
である。よって、へき地診療という名称がついて
いるが、自覚症状のない者の受診も多く、実際には
検診に近い意味合いのものになっている。

しかし、このような形態の診療を行う場合には
いくつかの問題点が存在する。診察の結果、通院
を要すると判断されても島外へ通うことは容易で
なく、結局島内で加療しなければならないこと、
一回だけの診療であるため、経過を正しくとらえ
られない危険を有するという事などである。

これらの問題点は島内設備の充実、島内医師と
専門医師との密接な連携によってかなり改善され
るであろう。何よりも大きな利点は島内で気軽に

受診できるということであり、このことは疾患の
早期発見、早期治療に直接結びつくと思われる。

今回の診療について述べると、内科診療は特に
検診の色合いが濃く、自覚症状のない中高年齢者
層の受診が目だった。腹部超音波検査は今回初め
て行われ、14例中2例の胆石を発見した。検診に
おける超音波検査の有用性はすでに確立しており、
今後も積極的に活用していく予定である。

眼科診療では、器具を使った診療によって日常
診療では発見されなかった疾患、特に網膜や硝子
体の病変が見い出され、専門医診療の必要性が痛
感させられた。

耳鼻咽喉科診療では日常よくみられる急性外耳
炎や急性中耳炎などのほかに、真珠腫性中耳炎や
感音性難聴も発見された。特にオーディオメーター
による聴力測定によって、多くの感音性難聴患者
が存在することが判明した。来年度以後も聴力測
定を継続的に行い、追跡調査する必要があると思
われる。

V. おわりに

1984年度船倉島へき地診療報告を行った。

なお蛇足になるが、耳鼻咽喉科診療は1泊2日
の予定で行われたが、悪天候のために船が出航せ
ず4泊もしてもらった破目になってしまった。離島
医療の厳しさの一面を感じさせる象徴的な出来事
であった。スタッフの皆様深くおわび申し上げます。

最後に、診療に協力して下さった辰口芳珠記
念病院岡部陽三先生、公立宇出津総合病院山村敏
明先生、輪島病院小林勝義先生、県立中央病院、
県厚生部の各位に深謝いたします。